

## 令和二年荒魂之會二月例會資料

日時・二月十五日（土） 正午時から午後二時迄  
会場 上野驛前茶房  
祭禮 山形・日枝神社黒森歌舞伎  
出来事 西郷隆盛擧兵（明治十年）  
人物生誕 人物忌日 渡邊綱

二月の回顧（十四名）			
保坂 弘司氏	昭和五十八年	二月 三日	三十七回忌
桶谷 繁雄氏	昭和五十八年	二月 十二日	三十七回忌
平泉 澄氏	昭和五十九年	二月 十八日	三十五回忌
坂本 太郎氏	昭和六十二年	二月 十六日	三十三回忌
太田 行藏氏	平成二年	二月 十七日	二十九回忌
倉野 憲司氏	平成三年	二月 二十八日	二十八回忌
佐藤 亮策氏	平成四年	二月 十一日	二十七回忌
星 運吉氏	平成四年	二月 十一日	二十七回忌
有光 次郎氏	平成七年	二月 二十二日	二十四回忌
樋口 清之氏	平成九年	二月 二十一日	二十二回忌
萩野 貞樹氏	平成二十年	二月 二十四日	十一回忌
山田 輝彦氏	平成二十一年	二月 十九日	十回忌
郡 順史氏	平成二十七年	二月 二十二日	四回忌

内容 正午時から午後二時迄  
研究会

- (一) 古代歌謡の世界を讀む 其の一  
『萬葉集研究』折口信夫著 報告者 竹内
- (二) 萬葉集輪讀
- (三) 日本書紀輪讀
- (四) 江戸武家事典輪讀

- ・「御即位記念特別展 令和の時代を迎へて」三之丸尚藏館  
(二月八日(土)～四月十二日(日))
- ・「特別展 日本書紀成立一二三〇〇年 出雲と大和」東京国立博物館  
(二月十五日(水)～三月八日(日))

## 折口信夫著『萬葉集研究』

- 一 萬葉詞章と踏歌章曲と
  - ・四季と戀の部の重んぜられてゐる理由
  - ・四季に分けたのは、四季の饗宴・雅會の際の物
  - ・宮廷・豪家の肆宴には、舊來の習慣として、男女一方人を分けての唱和があつた。さうして亂舞踊に終るのであつた。
  - ・直會には、主上及び家長の壽の讚美を、囑目の風物に寄せて陳べる類型的な歌を生み出す。
- 二 萬葉集の大歌
- 三 ふりくにごり うた
  - ・たまふるを略してふるといふ。此ふるといふ語は、外來の威靈を、身に密着せしめると言ふ用語令である。
- 四 うたの時代
  - ・うたへ・・・神に問ひかけるもの
- 五 相聞
  - ・男女の初めてのちぎりに、又、其の後も、神の意思をうたへの方式で申して神慮を問ふ。此時は、答へは歌によらず、兆しで顯れる。うけひの形である。
- 六 東歌
  - ・十四の東歌の概して二十よりも巧なのは、創作意欲に囚はれてゐないからである。
- 七 律文における漢文學素地
  - ・國漢兩様の文章を書くのが、萬葉時代の文人であつた。懷風藻と萬葉集と、共通の作者の多いのも不思議ではない。
- 八 代作詩
  - ・皇族・貴族の作物と傳へるものが、多く代作であらうと言ふ事は、やはり事實らしい。
- 九 創作態度
  - ・山部赤人は亦、宮廷詞人の一人らしいが、長歌及び抒情短歌は人麿をなぞり、敍景詩は黒人を寫してゐる。が、其を脱却して、個

## 二、例會豫定

三月二十一日(土) 午後一時から三時 上野驛前茶房  
『みそひと文字の抒情詩―古今和歌集の和歌表現を解きほぐす』  
小松英雄著  
報告者 小澤

四月(詳細未定)  
研究課題 『古今集遠鏡・上』本居宣長 報告者 竹内

五月(詳細未定)  
研究課題 『古今集遠鏡・下』本居宣長

六月(詳細未定)  
研究討論 『日本の古代歌謡と國語表現と』

七月(詳細未定)  
研究課題 『中國の古代文學(一)』白川靜

九月(詳細未定)  
研究課題 『詩經・國風』

十月(詳細未定)  
研究課題 『楚辭』

十一月(詳細未定)  
研究課題 『聖詠經(ニコライ譯の聖書・詩篇)』

十二月(詳細未定)  
研究討論 『日本、志那、西洋の古代歌謡』

## 三、催物案内

- 十 性を表す様になつた。  
萬葉學に一等資料のないこと
- ・私は、萬葉人の歌を作り、又、傳へた心持を考へた。
- 十一 萬葉びとの生活
  - 君 皇子尊
    - ・君は如何なる威靈をも、鎮齋して内在力とする事が出来るとの信仰が、早く種々の異教を包括する様になつた。
  - 女君 中皇命
    - ・君との血の極めて近く、宮廷の神のみこともちたるに最適當な古代風のなからひに在つた女君を、中皇命とよびわけた様であつた。
  - 巫女としての女性
    - ・元は、男方は神として假裝し來り、女方は精靈の代表たる巫女の資格において、これを迎へ、これに従うたのである。此が相聞歌の起りである事は述べた。
  - 妹の魂結び
    - ・男の衣装の中に、祕密の結び方のたまの緒で結び籠めて置く。さうして、旅中の守りとした。後には、女の身にも男の魂を結びとめて置く様になつたのだ。
- ・たま藻刈る澳へは漕がじきたへの枕のあたり忘れかねつも(卷一)
- ・此宇合の歌なども、今日は頻に家の我が枕のある床の様子が、目に浮んで思ひ去りにくい。かう言ふ時は、凶事があるものだ、舟行を恐れてゐるのである。
- 魂はやす行事
  - ・まつたけのなみたる見ればいはひとの我を見おくと立たりしもころ(卷二十)
- 靈の放ち鳥
  - ・鳥殊に水鳥は、靈魂の具象した姿だと信じた事もある。又其運搬者だとも考へられた。
- すめみま
  - をとめ・をとこ
    - ・唯をとこは、性の解放を祭りの當夜から許されるが、をとめは、神の外には逢ふ事が出来ぬ爲、をとめと言へば、夫を持たぬ女、處女、未通女と考へられる様になつたのだ。
  - 大臣・庶民